# あくまでかそれでもなおか

## ——ヴォーリズから今和次郎へ

森　仁史

この三月に久方ぶりに近江の大津を訪れた。目的は「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展」を見るためだった。ヴォーリズはグランド・キャニオンに隣接した自然豊かな町に育ち、デンバーで大学を終え、この卒業一年後わずか二十四歳にして明治三十八年に初めての国外宣教地日本に立ち、大正二年に一度帰国するもののずっと日本に住み、昭和十六年には日本に帰化し、一柳米来留と改名し昭和三十九年近江八幡で没した。建築家としての彼の業績をたどる展示は既知のものも多かったし、彼の場合かなり多くの建物が残っているので、いまも存在しているものを写真や記録でなぞる展示になっていた。もっとも印象深かったのは来日当時に彼が記した神の摂理についてのメモであった。それは森羅万象が創造主によって造られたと同時に、それを担う人間がなすべきこともやはりすべて神の配慮によるものであるという宇宙的意志の全体構成を記したものであった。彼の言うところは総てを神が定めたというよりは、神がなにをなすべきかの方向と領域を人類に与えているということであった。神による決定というよりは、あるべき意識世界の構造が定められているということだ。このような信念の持ち主であるからこそ来日した時から死去するまで、自らのなすべき使命に迷いがなかったのだ。もちろん、彼の設計した建物が信仰をともにする人々のためのものであったことも理由かもしれないが、ヴォーリズの本拠であった近江八幡を始め各地の建物はいまも愛され続けている例が多いようだ。それは造形としての見事さに加えて、使命を発現する存在としての建物の力なのかと考えないわけにはいかなかった。つい最近でも同じ滋賀県の豊郷小学校の校舎をめぐって取壊そうとする行政と保存しようとする住民の強い対峙がこうした事情を物語っている。住民は建物が実用的に使用に耐えること以上に、何世代にも渡って愛し続けたいという理由で建物を残そうとしたからだ。

この日にもう一箇所尋ねたのは琵琶湖文化館〔図1〕であった。報道されたように同館はこの三月をもって閉館となった。湖水の上に建てられ、昭和三十六年三月に開館した城郭風デザインの博物館はさすがに時代を感じさせるし、エレベータ、空調設備がないことが運営を難しくするもっとも致命的な理由だったのだろう。しかし、同館がユニークなのは一億五千万円の建設費のうち九〇〇〇万円が寄付金によってまかなわれたということである。募金には個人としては同県出身のヤンマー創業者山岡孫吉の一五〇〇万円がもっとも多く、団体としては大津市の二三〇〇万円がもっとも大きかった。建物は竣工後滋賀県に引き渡され、県立博物館として活動してきた。建設当時滋賀県に博物館をつくりたいという多くの人々の熱意が存在し、上からの公共工事としてではなく施設が実現したということなのである。ところが、四十五年を経てこの博物館施設を維持しようとする意志は杜絶したのであった。

このときの展示は近江の仏教美術を多くの収蔵品によって概観しようとするもので、平安から鎌倉、室町、桃山時代の仏画、仏像、調度品が所狭しと並んで、圧巻であった。都に隣接した地域がその造形において都とは異なる相貌を見せて展開した様はひどく興味深かったし、今まで余り注意を払わなかった鎌倉期の仏画を面白く見ることができた。もう再び見ることはないだろうと思い、初めて一階の展示室まで足を伸ばしたのだが、そのラウンジにはなんと建設当初からと思われるハーマン・ミラー社製シェル・チェア（かのイームズのデザイン）が並んでいた。入口には寄付金募集から竣工に至る事情を刻んだ立派な銘版と四百名近い寄付者一覧が掲げてあった。恐らくは自らの熱意によって自らが望んだ施設が完成した日に、建物の古風な外見とともに、もっともモダンな傾向を代表していたこの家

具もこれを実現した人々の誇りの一端だったのだろう。そして、それら総てを葬る日を同じ地域の人々は無関心に迎えようとしている。文化舘の向かいには最新設備を備える巨大な県警本部の高層ビルが建設中だった。

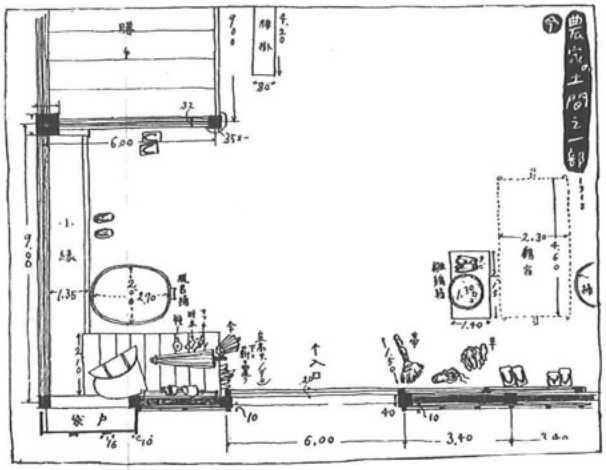
新潟県糸魚川の農家を飛び出して堅田に働きに出てきた一人の農民はヴォーリズに啓示を受けて、近江八幡に移住し牧師となった。この長男が岡林信康である。彼も大学に入って山谷に行くまでは、固く牧師になろうと心に決めていた。ヴォーリズの設計した幼稚園、小中学校〔図2〕で育ち、彼自身もヴォーリズのあらゆる著作に目を通すほど傾倒し、高校生のとき無理を言って病床のヴォーリズに面会したほどであった。岡林の音楽が讃美歌からプロテストソング、さらに歌謡曲、民謡へと変転した足跡を岡林自身はヴォーリズの生き様と重ね合わせて意識している。彼の近著『バンザイなこっちゃ！』（ゴマブックス、二〇〇五年）のタイトルはヴォーリズの独特な日本語表現だといい、「素晴しいことだ」の意だという。還暦を前に岡林にも率直に生い立ちと自己の本質を淡々と語れる時が巡ってきたようだった。いま岡林は自身の音楽と同じように、少年時代を過ごした学校や教会の西洋風建築に影響されて、自宅を「純粋な日本建築よりも、そこに西洋や外国の様式を少し取り入れたものが好き」だという感覚にあわせて改造したのだと言う。ここにもヴォーリズのもたらした種子が芽吹いていると言えるかもしれない。こうしたことこそヴォーリズ建築のあるいはヴォーリズが生涯をかけて日本で展開して見せた事業の本質なのではないか、と思えた。

1　琵琶湖文化舘

2　ヴォーリズ《近江兄弟社学園ハイド記念舘》1931年
（『ヴォーリス建築の100年』所収）

琵琶湖文化舘の展示を見ながら思ったもうひとつのことはこの地域の文化がやはり都で展開される造形と同じ歴史を共有しているという紛れもない事実だった。どんなにかつての社会が人の行き来に難儀なものであっても、文学や仏像や建物はある時代性を共有しているということである。もちろん、地方色というものは存在するが、展開は不可逆的に進むことは間違いないし、その価値観も等しく共有している。この意味でやはり日本は相当に同じ色合いに染められた国であったのだろう。昨年、わが町の戸定邸は建物として重要文化財の指定を受けた。しかし、結局美術舘建設には至らなかったわが町では、文化財担当は長年我が町がこの建物の文化的意義を見過ごしてきたことをてんとして恥じないらしい。なぜなら、国と市はそれぞれ何が重要な文化財と考えるか基準が違うから、なのだという。これでは日本国は幾千もの異なる文化指標を持つことになり、それはそれで反グローバリゼーションを貫くことができる画期的な見地なのだが、そこまでユニークな都市づくりにこの町が努力してきていないことは事実として明白である。むしろ、この町が近江とは違って東国の小さな渡し場と牧場しかなかった地域であり、普遍的な文化指標で計れるものが殆どないからなのではないか。わが東国の辺境では都に連なるものの存在が希薄であり、殆ど人跡未踏の地なれば普遍的価値を顧慮したいとしても、その対象がないから価値基準が違うなどとのたまっていられるのではないか。

しかし、このことは地域ではなく時間軸にも当てはまることなのだとも考えた。つまり、近江では四十五年前に尊ばれた基準がいま地に落ちよう



3　今和次郎「農家の土間の一部」1918年（『民俗と建築』より）

としている。そのように日本と日本人は自らを変えてきたのだろう。あるいは、普遍的にはあってはならないことも時間を違えれば妥当な判断と主張しうることになるのだろう。

それで思い起こしたのは今和次郎の民家研究だ。今が『日本の民家　田園生活者の住家』（鈴木書店、大正十一年五月）にまとめた民家は彼らが大正七年から実地に調査して回った調査成果なのだが、それは今の調査採集を旨とし、歴史的に標準とされる典型を求めようとしていたのではなかった。今は農家は都会の家が失った「根本の工夫」を体現しており、それがほんらいの建築の美につながるものだと考えていた。つまり、今は建物よりも、それを建てそこに生活を営む人間の暮らしにより強い関心を向けていたのである。だから、必ずしも古く由緒ある建物でなくてもよかったのである。関東大震災後のバラックに今が駆り立てられたのは今の興味の対象が変ったのではなく、都会の住民がこのときにはどうしても「根本の工夫」を発揮せずにはいられない情況とその産物が一時に出現したからなのだ。この調査態度から、例えば土間を歩く農夫の癖が置かれた道具の所在場所を規定することに着目し〔図3〕、抽象的な生活用具の種類や形態よりもそれがどこでどのように使われるかに目が向けられている。ここには人々の暮らしが総体として家の工夫をつくりあげていくという構造こそが建物総体の美と意味をつくるのだという見識がある。この辺りにすでに今と柳田國男との齟齬ないしは分岐が生ずる本来的な姿勢の相違を認めることができるだろう。こうした今の発想からは、当然ながら都会の住宅の中や人の歩く跡の追跡への関心が必然的に導き出されることになる。即ち、都会では考現学となって展開される活動である。農家（農民、あるいは田園生活者）―バラック（被災者）―考現学（都市住民）と表面的にその時々に時代の表象を追いかけているように見えるが、今にとってはいずれにおいても人々の動作行為の本質を見極め、それらの集積としての建築、ひいては人の所産の把握にたどり着くことを目指そうとしているのだ。それらを分析把握することで、人々の行為から美の析出にたどりつこうと意図しているのだ。それは恐らく今が東京美術学校の卒業制作のうち少なくとも二点を生命主義的な意欲から導き出したときに始まっているのではないか。乳母車と若い芽吹きの樹木を重ねて描き出すのはどう考えても生命の誕生を表象しているとしかいえない〔図4〕。今の関心は抽象化され、純化される造形ではなく、流動する人々の生の行い、つまり生活に向かわざるを得なかったはずなのである。この時期の今の感覚や民家研究から導きだされた視点は大正十三年に建てた自邸〔図5〕によく現わされている。隔てのない二室とそれらをまたぐ玄関が殆ど唯一のデザイン的主張になっている。ここで生活し研究するための便利が追究されている。

さらに、今の発想がラジカルなのはそこからもっと先に進む筋道を見通しているからである。

……田舎家の研究は、主として無装飾の態度の生活者の工作そのものをみつむる仕事であり、無装飾の裸の工芸と云ふことを考へてゐる事になるのである。……

日本の茶室の味ひは、具体的にこれらの両方の内的融合から現はれたものの一つだと考へねばなるまい。

つまり、今は田舎家が宿している「裸の工芸」こそは茶室に結晶する基

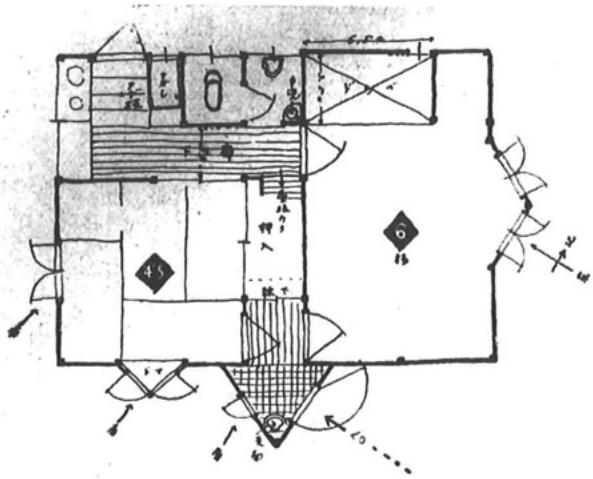
本因子なのだと位置づけたのである。確かに、理念的な「見立て」によって茶室が成り立つためには、見立てる対象の選択があり、その見極めはもともとそれらが所在していた田舎家にあった姿から始めなければならないだろう。このことは単に起源が重要だと言っているのではなく、美がどこに通底しているかの見識の問題とすべきだろう。

今はこれ以前に平和記念東京博覧会（大正十一年三月）のパヴィリオン建築を批評したとき、一面では設計した分離派建築会員の仕事を日本の新しい建築造形として評価しつつ、彼らが拠って立つ構造について鋭く指摘することを忘れなかった。

……私は分離派の人達が夢想してゐる一つの仕事は、民衆的な而して現実的なものではなく、人の稀な孤島の上か、淋しい野の上か、またもつと積極的に突き進めて考へるならば、劇場の舞台の上の芸術にならなければ正確な意味で成立しないと考へるのである。そこでは凡ての空間は作者の意志で支配することが出切る。人物の運動も、衣裳も、人数も、またそれらの配列も厳密に規定されてい、のである。でも、いかなる建物でも日常生活を抱有しなければならない点で、こんな規定をまうけるわけには行くものでない。

4　今和次郎《工芸各種図案》1913年より

今の言わんとするところは美のあるべき場所を展覧会場や舞台の上ではなく、人々が日々暮らす日常のなかにこそ求めるべきだという根本的なしかし厳しい難しい主張である。少なくとも、これ以降美術工芸やデザインにそうした日常生活に奉仕する作品制作に取り組む者が現れることに先駆けた発言であり、あくまで舞台に残ろうとしたものとの隔絶は埋めがたく広がらざるをえないだろう。



5　今和次郎《自邸》1924年

ひるがえって、我々は今の指摘やそれに呼応した人々の活動からもう八十年以上も歳月を重ねてきている。しかし、そのあげくに地域に美を照らす行為や所業を無にするものが後を絶たない現実に暮らすようになっている。それもまた、日本のあるべき姿の一面だろうと思う一方で、それでもなお今和次郎やヴォーリズの行為が最低限言説としては生き永らえるのだということも確かめておきたいと思う。それが恐らく我らが日々古い本に手を伸ばし、読み、考えるゆくたての「根本の工夫」なのではあるまいか。恐らくは何ものも残すことは叶わないとしても、先人の言説に真理を読むことに無上の喜びを感じとることくらいならば一老生にも許されて然るべきだと考えたいのだ。

# 一寸

第三十四号　二〇〇八年五月

## 第三十四号目次

新・旧刊案内34
書痴、「東京下谷根岸及近隣図」を読む
栗田萬二郎のことなど　青木　茂　1
石川寅治の裸婦版画をめぐって　岩切信一郎　11
行方不明後の《藤牧版画》の足跡（4）
—藤牧版画の後摺りについて17　大谷　芳久　17
他人の空似
—坂本繁二郎「夏野」と北斎「駿州　江尻」　金子　一夫　34
鬱々記　丹尾　安典　37
楠山秀太郎の事ども　銅・石版画遺聞30　森　登　42
あくまでかそれでもなおか
—ヴォーリズから今和次郎へ　森　仁史　48
■書書遊遊
ドミニクあるいは挿絵本の愉楽　山田　俊幸　52

## 新・旧刊案内34

### 書痴、「東京下谷根岸及近隣図」を読む
### 栗田萬二郎のことなど

青木　茂

■本誌先号に書いた僕の切ない想いを汲んで、編集長と同人諸氏は長い引用を許してくれたことと思う（許してくれたことにする。同人誌であるから読者の迷惑は考えない）。それは改題『日本及日本人』四五五号（明治四十年三月十五日）に載った「狗仙人栗田萬二郎」で筆者は桜田大我の一文である。本文には筆者のやや長い前置はあるが、浅井忠の電話口での『左様栗田萬二郎といふ人は今は死ましたが、大崎人でした、故あつて私が心得て居りますが、惜い哉ソレは先生の後半身丈のことです、併し知つて居る事柄丈は何時なとお話し致しませう、』というのを聞いて、京都の高等工芸学校の画室で伺ったという談話筆記である。以下の引用は編集長が写真版にしようというのに従って早大図書館でのコピーをそのまま使うこととする。これならば誤字や誤植はない〔以下コピー写真版〕。

ソレに焼きがまづい、お負けに現像が下手と來て居るから、翁の俤さへ現はるればソレで此の寫眞屋さんはホク〳〵ものです。

◎栗田萬二郎といふ大崎人は七十イクツかで卅二年に無くなられた、久しく根岸に住んで居られたが、翁は元來人と交らぬタチで友人といッたら淺草病院の熊阪某と、一時政治界に